

土佐日記における文の構造

——文の構造の記述法の試み——

長 田 久 男

序

文の構造についての考え方には、現在、必ずしも定説がない。^{注①} 文の構造の記述方法も、試みの段階にあるものが多い。

本稿もその一つである。現代文について試みた文の構造の記述法を用いて、古典作品、土佐日記の文を処理してみる。現代文と、古典の文の両者の記述に適用できる記述法の設定をめざす、古典の文についての第一回の作業である。

今回、土佐日記を選んだのは、土佐日記が古典作品の中で、仮名の日記として初期のものだからである。

第一 テキストと文の認定

テキストに、岩波書店版、日本古典文学大系・鈴木知太郎氏校注「土佐日記」（昭和三十二年十二月第一刷本）を用いた。これを選んだ事情は、次の通りである。

貫之自筆本が発見されなにかぎり、一般に学界において善本と

されているものの中から選ぶべきである。鈴木氏校注「土佐日記」は、今日、学界において善本とされている藤原為家自筆本系統本の青谿書屋本を底本とした活字本の一種であるため。

鈴木氏校注「土佐日記」では、四六一文を認定している。ここで「文」とは、活字本の上で、普通の場合、句点の次から句点までの地の文をさし、特別の場合、たとえば、歌の場合には、句点の次から歌で終止している場合、歌の最後までをさす。

「文」の認定は、ほとんどを鈴木氏のままとしたが、次の一〇か所を改めた。（②以下の用例は、鈴木氏校注「土佐日記」の本文で示す。）

○…ありけるをんなわらはなんこのうたをよめる。^(改1)

○かみからにやあらん、^(改2)くにひとのこゝろのつねとして、…

○三日。おなじところなり。もしかぜなみの「ししばし」とをしむ

こゝろやあらん、こゝろもとなし。(改3) (1月3日・三二べ)

○うつくしければにやあらん、いとおもはずなり。(改4) (1月7日・三四べ)

○あかずやありけん、はつかの、よのつきいづるまでぞありける。(改5) (1月20日・四二べ)

○おぼろげの願によりてにやあらん、かぜもふかず、よきひいできて、こぎゆく。(改6) (1月21日・四三べ)

○まことにやあらん、かいぞくおふといへば、よなかばかりよりふねをいだしてこぎくるみちに、たむけするところあり。(改7) (1月26日・四五べ)

○いつとせむとせのうちに、千とせやすぎにけん、かたへはなくなり(改8) (2月16日・五八べ)

○なほあかずやあらん、またかくなん。(改9) (2月16日・五八べ)

○けふはましてはゝのかなしがらるゝことは、くだりし(改10) (1月11日・三七べ)

即ち、一〇か所とも、鈴木氏は読点としているが、次に述べる事情から句点に改めた。

(改1)の箇所。この場合の連体形止めは、「をんなわらはなん」に呼応する結びの連体形と考えるべきである。

(改2) (改9)の箇所を、鈴木氏は、いわゆる挿入句の終わりとしたのであろうか。いずれも、文頭に位置した挿入句であり、形式的にも文終止と考えることが可能な箇所である。

(改10)の箇所。鈴木氏は、この個所の補注に「けふはましては

土佐日記における文の構造

ゝのかなしがらるゝことは』がどこに続くのかはつきりしない。」と述べた後、諸説を紹介し、「いずれにしても、この文脈の処理と解釈とは、なお熟考を要すべきものがある」としている。日本古典全書、萩谷朴氏校注「土佐日記」の解釈(同書・八二べ)に従つて句点に改めた。即ち、「……ことは。」と切つて、その「は」を感動を表わす助詞とした。

以上によつて、本稿では、土佐日記に四七一文を認定した。以下の考察は、この四七一文を材料にしての記述である。

さて、文の内容理解ができなければ、文の分解はできないと言われる。したがつて、文の構造記述は、一応、ある一つの解釈に基づいて作業を進める必要がある。「文」の認定をほとんど鈴木氏に従つたことは、その意味で、「文」の解釈の出発点を、まず、鈴木氏に従おうとしたことである。しかし、文の内部構造のこまかな点については、鈴木氏の校注書には、必ずしも一々明記していない。その点は、記述者の解釈に基づくことになる。したがつて、解釈にあやまりがあれば、文構造の記述結果にも必然的にあやまりの生ずる可能性がある。しかし、その場合でも、記述の方法そのものには、影響を与えることは少ない。

第二 文の構造の記述方法

手続き 1

文を、まず「述体の文」と「喚体の文」とに二大別する。

述体の文

○そのよし、いさゝかに、ものにかきつく(12月21日)
喚体の文

○うるはしき花かな。

山田孝雄博士は、句を「述体」と「喚体」の二つに大別された。また、時枝誠記博士も統一する辞の性質によつて、文を「述語格の文」と「独立格の文」とに二大別された。市川孝氏、芳賀綏氏にもほぼ同様の二大別の説がある。これらの二大別は本稿においても採用する。

手続き 2

述体の文を直接構成している単位を「一次成分」とする。

①このひと／＼のふかきこころざしは／＼このうみにも／＼おとらざるべし。(1月9日)

②これをみれば／＼はるのうみに、あきのこのはしもちれるやうにぞ／＼ありける。(1月21日)

右の／＼線が「一次成分」の切れ目である。例文は、①②とも「一次成分」三つから構成されている。

「一次成分」を求める作業手順には、① 文節の係り受け図を作り、それによつて求める場合と、② 文節の係り受け図によらずに求める場合との二つがある。二つは、手順に違いがあるだけで原理は同じものである。

③ 文節の係り受け図によつて、文を構成している直接単位(一次成分)を求める方法

1、文を文節に区切る。④右傍の／＼線で文節を示す。

①このひと／＼のふかきこころざしは／＼このうみにも

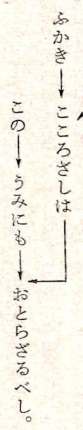
おとらざるべし。(1月9日)

②これをみれば／＼はるのうみにあきのこのはしもちれるやうにぞありける。(1月21日)

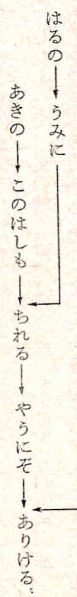
2、文節の係り受け図を作る。

⑤ Aの文節がBの文節に係ることを、A → Bの形で示す。

①このひと／＼の



②これをみれば



3、文節の係り受け図によつて、文を構成している直接単位(一次成分)を求める。

さて、次の図解の□・□が、文を構成している直接単位である。即ち「一次成分」である□印の部分で、「係り成分」、□印の部分で、「受結び成分」と呼ぼう。

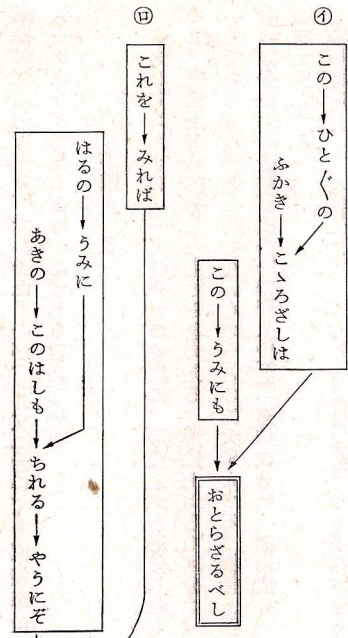
「係り成分」は、次の三つの条件を満足させなければならない。「係り成分の三条件」と呼ぶ。即ち、この三つの条件を満足させるような「係り成分」を求めることが「一次成分」を求める手続きで

ある。

④ 「係り成分」内の文節は、その「係り成分」内の最後の文節（この文節を代表部と呼ぶ）に直接・もしくは間接に係っていくこと。ただし、例外がある。それは、「係り成分」の中が、橋本博士のいう「同位文節」②③になっている場合である。

③ 「係り成分」は「受結び成分」に直接、係っていくこと。

② 「係り成分」どうしは、位置を入れ換えることができること。位置を入れ換えても、もとの文と論理的意味にかわりがない。



- ① このひと／＼のふかきころざしは／このうみにもおとらざるべし。
- ② 文節の係り受け図によらずに、直接単位（一次成分）を求める方法
1、文全体を、意味を考えて二つに区切り、「係り成分1」を求める。

係り成分1
④ これをみれば／はるのうみにあきのこのはしもちれるやうにぞありける。
(代表部)

2、「係り成分1」を除いた残りを、意味を考えて二つに区切り「係り成分2」を求める。

①：／このうみにも／おとらざるべし。
(代表部)

係り成分2

③：／はるのうみにあきのこのはしもちれるやうにぞ／ありける。
(代表部)

3、「係り成分2」を除いて、残りがまだ区切れるときは、同じ操作を次々とほどこせばよい。

ところで、「係り成分1」「係り成分2」：「係り成分N」（注、Nは最後という意味）……を求めるときの区切り方は、先にあげた「係り成分の三条件」を全部満足させる区切り方でなければならない。

以上、②③いずれの方法によつても、文を構成している直接単位（一次成分）は、次のようになる。

係り成分1 受結び成分
① このひと／＼のふかきころざしは／このうみにも／おとらざるべし。

係り成分2
④ これをみれば／はるのうみにあきのこのはしもちれるやうにぞ／ありける。

要するに、文を構成している直接単位（一次成分）を認定する手順は、先にあげた「係り成分の三条件」を全部満足させる「係り成分」をできるだけ多く認定するか、あるいは、この考え方を準用して、「受結び成分」以外の「一次成分」を認定することである。また、文を構成している直接単位（一次成分）は、その文に即して、相対的に認定されるものである。したがって、たとえば、A文において直接単位（一次成分）であつたものが、B文においても直接単位（一次成分）であるとは、必ずしも言えない。

手続き 3

述体の文における「一次成分」の種類に、形態上から区分したものと、機能上から区分したものを考える。形態上からの区分は、「句であるもの」と「句でないもの」との二大別とする。機能上からの区分は、「受結び成分」「係り成分」「連結成分」「標示成分」の四大別とする。

係り成分。係り成分。受結び成分
○このことば[△]な[△]には[△]な[△]けれど[△]も[△]もの[△]い[△]ふ[△]や[△]に[△]ぞ[△]き[△]こ[△]え[△]た[△]
(句でない) (句) (句でない) (句)

(1月21日)

連結成分① 受結び成分

○し[△]かれ[△]ども[△]ひ[△]ね[△]も[△]す[△]に[△]み[△]か[△]ぜ[△]た[△]す[△]

(2月4日)

(句でない) (句)

標示成分② 受結び成分

○ま[△]つ[△]ば[△]ら[△]め[△]も[△]は[△]る[△]ば[△]る[△]なり[△]。

(2月5日)

(句でない)

手続き 4

述体の文における「一次成分」の組み合わせ・排列の類型をもつて、述体の文の構造に関する第一次段階の類型とする。その結果、
①入れ換え・基本文 ②入れ換え・句の文 ③入れ換え・混合文・
④連結型 ⑤標示型の五つをたてる。

①入れ換え・基本文

係り成分1

○むかしとさといひけるところにすみけるをんな[○]このふねに[△]まじれりけり。
(1月29日)

右の例文で「むかしとさといひけるところにすみけるをんな」と「このふねに」とは、位置を入れ換えることが可能である。例文は、「係り成分」二つと「受結び成分」一つとから構成された文である。要するに、「入れ換え・基本文」は、「受結び成分」が一つで、他は「係り成分」である。しかも、「係り成分」は、全て「句でないもの」である。「係り成分」が句でないとき、それを[△]印で示す。

②入れ換え・句の文

係り成分1

○これらをひとのわらふをき[△]て[△]うみは[△]ある[△]れども[△]こゝろは[△]すこしなきぬ。
(1月9日)

係り成分2

受結び成分

右の例文で、「これらをひとのわらふをき[△]て」と「うみはあるれども」とは、位置を入れ換えることが可能である。例文は、「係り成分」二つと、「受結び成分」一つとから構成された文である。要するに、「入れ換え・句の文」は、「受結び成分」が一つで、他は「係り成分」である。しかも、「係り成分」は、全て「句」である。「係り成分」が句であるとき、それを[△]印で示す。

③ 入れ換え・混合文

係り成分 1

係り成分 2

○かぜなみやまねば／なほおなじところに／とまれり。(1月16日)

(句) (句でない) (句)

右の例文で、「かぜなみやまねば」と「なほおなじところに」とは、位置を入れ換えることが可能である。したがって、「係り成分」二つと、「受結び成分」一つとから構成された文である。要するに、「入れ換え・混合文」は「係り成分」が「句であるもの」と「句でないもの」とが混合している型である。

④ 連結型

連結成分 ① 受結び成分

○しかれども／ひねもすに／なみかぜたゝず

(2月4日)

右の例文で、先に述べた②の手順によつて意味を考えて全体を二つに区切ると「しかれども」の次で区切れる。「しかれども」が、「連結成分」である。「連結成分」の切れ目を①印で示す。「連結成分」は普通、接続詞と呼ばれるものである。「連結成分」を除いた残りを二つに区切ると、

○ひねもすに／なみかぜたゝず。

となる。しかし、「ひねもすに」と、はじめの「しかれども」とは、その位置を入れ換えて、

○ひねもすに／しかれども／なみかぜたゝず。

というは無理である。ということは、「ひねもすに」が「二次成分」でないということである。

⑤ 標示型

次が「標示型」の例である。

土佐日記における文の構造

標示成分 ① 受結び成分

○まつばら／めもはるばるなり。

(2月5日)

標示成分

○かじとりのいふやう

② 受結び成分

とぞいふ。

(1月21日)

右の例文で、全体の意味を考えて二つに区切ると、「まつばら」「かじとりのいふやう」の次で区切れる。「まつばら」「かじとりのいふやう」が「標示成分」である。「標示成分」の切れ目を①印で示す。

「標示」の用語及び概念は、芳賀綏氏にはほぼ従う。芳賀氏は、積極的に関係づけのはたらきをせず、ただ消極的に文脈の中に意味をもつといった形の文節をセンチテンスの中における『遊離語』とし、『遊離語の』一つに、「標示」を入れている。そして、

○土俵上、行司の軍配かえって両者待たなしの立合いです。

○池田いわく、「わたしはウソは申しません」。

などの――線を「標示」としている。本稿では、右の場合――線を「標示成分」とする。

「標示型」は、「標示成分」と「受結び成分」の二つから構成される型の文である。

「受結び成分」の「めもはるばるなり」を二つに区切つて、

標示成分 ①

○まつばら／めも／はるばるなり。

②

○めも／まつばら／はるばるなり。

とした場合、②と③の位置を入れ換えて、

○めも／まつばら／はるばるなり。

③

○めも／まつばら／はるばるなり。

となる。つまり、aの「いへのひとのいでいり」を、b・cに分配することになる。

〔屈折構文〕

例文は「一次成分」としては、

○みをつくしのもとよりいでてなにはにつきて、かはじりにいる。
(2月6日)

のようになる。この段階では、「入れ換え構文」である。

ところで、「係り成分」の「みをつくしのもとよりいでてなにはにつきて」が「句」をなしているので、「手続き5の前段」に従つて、「二次成分」を求めてみると、

○みをつくしのもとよりいでて、なにはにつきて

となり、「二次成分」の「みをつくしのもとよりいでて」も、「なにはにつきて」も共に「句」をなしている。次に、「手続き5の後段」に従つて、述体の文の構造に関する第二次段階の類型に取り入れることになる。例文は、次のようになる。

○みをつくしのもとよりいでて、^{a)}なにはにつきて、^{b)}かはじりにいる。^{c)}

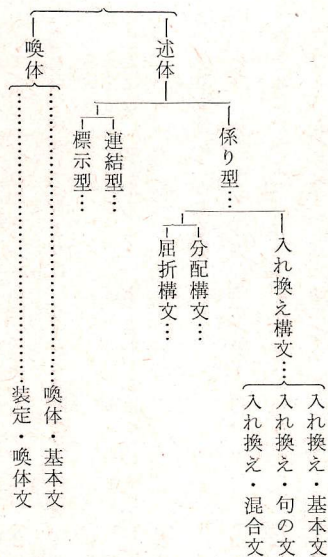
〔入れ換え構文〕を、一本の直線にたとえらると、「屈折構文」は、

△^{a)}△^{b)}△^{c)}のように三本以上の直線が連続し、かつ屈折した構造の文である。屈折を示す符号に「△」を用いる。

手続き 6

土佐日記における文の構造

上記「手続き4」での類型と「手続き5」での類型とを組み合わせて、述体の文の文構造の類型とする。それに、喚体の文の型を加えて、仮に次のようにまとめてみた。



「入れ換え・基本文」「入れ換え・句の文」「入れ換え・混合文」の三つは、成分の組み合わせ排列に、一次成分だけを取り入れたものであり、かつ、係り成分の入れ換えが可能であるという点で共通している。「入れ換え構文」と仮称する。それに対し、「分配構文」と「屈折構文」とは、成分の組み合わせ排列に二次成分以下をも取り入れてあつて、しかも、係り成分の入れ換えが不可能である。

「入れ換え構文」「分配構文」「屈折構文」の三つは、文頭に位置する一次成分が、「係り成分」である点で共通している。「係り型」と仮称する。文頭に位置する一次成分が「連結成分」であるのを「連結型」、文頭に位置する一次成分が「標示型」と仮称する。

「係り型」「連結型」「標示型」は、すべて、「受結び成分」を

持つていて、それが最後に位置していることが、共通した現象である。この事実に着目して、これらを一括して「述体の文」とし、次の「喚体の文」に対立させた。

「喚体の文」は、山田博士の「喚体の句」時枝博士の「独立格の文」、市川氏の「投げかけ文」、芳賀氏の「非叙述体の文」と同じである。この型の文は、①体言あるいは体言相当語、②体言十終助詞、③感動詞のいずれかで終止する。

「喚体の文」を、もし直接単位に分解するとすれば

①うるはしき／花かな。(山田博士の用例)

②山深み春とも知らぬ松の戸に絶え／かゝる／雪の玉水

(時枝博士の用例)

③なにも知らなかつた／私！(市川氏の用例)

④そこへ行くかわい／お嬢さん！(芳賀氏の用例)

のように、体言(体言相当語の場合もある)の直前で二分される。二分されたものにそれぞれ「成分」の名称をあたえたとすれば、／線より上を、佐久間鼎博士の用語を借用して「装定成分」と呼び、／線より下を「喚体成分」と呼んでおこう。

次の例は、「喚体成分」だけの例である。

○太郎や。(市川氏の用例)

○おい。(市川氏の用例)

○真知子さん！(芳賀氏の用例)

要するに「喚体の文」の直接単位は、「装定成分」と「喚体成分」であるか、または、「喚体成分」だけである。

第三 構造上からみた「土佐日記の文」

土佐日記、四七一文について、第二に述べた方法で、その文構造を処理した。その結果について述べる。用例は紙面の都合で最小限とする。

入れ換え・基本文

1、係り成分が四つある例、①②③④が係り成分である。

○けふ、^①／かくくして^②／いづみのなだより^③／をづのとまりをおふ。^④

(2月5日)

○かかるあひだに^①／ふなぎみの病者^②もとよりこち／しきひとにて^③／かうやうのこと、^④／さらにしらざりけり。

(2月7日)

○たちてゆきしときよりは、^①／くるときぞ^②／ひとは^③／とかく^④／ありける。

(2月16日)

○こよひ、^①／かかること^②と^③／こわだかに^④／ものも^⑤／いはせず。

(2月16日)

2、係り成分が三つある例

○そのよし^①／いさ／かに^②／ものにかきつく。^③

(12月21日)

○かみのたちより^①／よびに^②／ふみ^③／もてきたなり。

(12月25日)

○ひと^①／たえず^②／とぶらひに^③／く。

(1月5日)

○かくて^①／このあひだに^②／こと^③／おほかり。

(1月7日)

3、係り成分が二つある例

○もてきたるものよりは^①／うたは^②／いかがあらん。

(1月7日)

○これぞたゞはしきやうにてむまのはなむけしたる。

(12月23日)

○講師^①むまのはなむけしにいでませり。

(12月24日)

○かくうたふに「ふなやかたのちりもちり、そらゆくくももたゞよひぬ。」とぞいふなる。

(12月27日)

4、係り成分が一つある例

○やぎのやすのりといふひとあり。

(12月23日)

○それのとしのしはすのはつかあまりひとひのひのいぬのときにかどです。

(12月21日)

○このいけといふはところのななり。

(1月7日)

○かくはいふものか。

(1月7日)

5、受け結び成分だけの例

○なほおなじとまりなり。

(1月1日)

○きのふのごとし。

(1月6日)

○いまし、かもめむれゐてあそぶところあり。

(2月5日)

○かならずしもあるまじきわざなり。

(2月16日)

入れ換え・句の文

1 「係り成分」が一つある例。

○をともすなる日記といふものをむなもしてみんとてするなり。

(12月21日)

○かぜふけばいであらず。

(1月4日)

○ことひとのもありけれど、さかしきもなかるべし。

(12月26日)

土佐日記における文の構造

○このうたをこれかれあはれがれども、ひとりもかへしせず。

(1月7日)

2 「係り成分」が二つある例。

○ありとあるかみしも、わらはまで多ひしれて、一文字をだにしらぬものしが、あしは十文字にふみてぞあそぶ。(12月24日)

○「まからず」とてたちぬるひとをまちてよまん。」とてもとめけるをよふけぬとにやありけんやがていにけり。

(1月7日)

○くちをしく、なほひのあしければ、ゐざるほどにぞけふはつかあまりへぬる。

(1月15日)

3 「係り成分」が四つある例。

○ところのなはくろく、まつのいろはあをく、いそのなみはゆきのごとくに、かひのいろはすはうに、五色にいまひというぞたらぬ。

(2月1日)

入れ換え・混合文

1 係り成分が二つある例。②「係り成分」が句である場合を印で示す。

①かぜなみやまねばなほおなじところにあり。(1月5日)

②「そもそいかよんだる。」といふかしがりてとふ。(1月7日)

③けふふねにのりしひよりかぞふればみそかあまりここぬかになりにけり。(1月30日)

2 係り成分が三つある例。

④おほかたのみなあれにたれば、「あはれ」とぞひとびといふ。

④このことば、なにとはなけれど、ものいふやうにぞきこえたる。
(1月21日)

⑤くすし、ふりはへて、とうそ、白散、さげくはへて、もてきたり。
(12月29日)

⑥そのおとをきよて、わらはもおむなも、いつしかとしおもへばにやあらん、いたくよるこふ。
(1月26日)

⑦かくあるうちに、京にてうまれたりしをんな、ごくにてにはかにうせにしかば、このごろのいでたちいそぎをみれど、なにごともいはず。
(12月27日)

3 係り成分が四つある例。

○かゝるあひだに、ひとのいへのいけとなあるところより、こひはなく、ふなよりはじめてかはのもうみのも、ことものも、ながひつになひつ々けて、おこせたり。
(1月7日)

4 係り成分が五つある例。

○かうやうなるをみてや、むかし、あべのなかまろといひけるひとは、もろこしにわたりて、かへりきけるときに、ふねにのるべきところにて、かのくにひとむまのはなむけし、わかれをしまて、かしのからうたつくりなどしける。
(1月20日)

屈折構文

1、全体で二回屈折している例。⑧はここで屈折していることを示す。

○をどこをもんなも、いかでとく京へもがなとおもふこゝろあれ

ば、このうたよしとにはあらねど、げにとおもひて、ひと、おすれず。
(1月11日)

○くるしくこゝろもとなければ、たゞひのへぬるかすを、けふいくかはつかみそかとかぞふれば、およびもそこなはれぬべし。
(1月20日)

○こゝろもとなさに、あけぬから、ふねをひきつゝのほれども、かはのみづなれば、ゐざりにのみぞるざる。
(2月9日)

2、全体で三回屈折している例。

○しつべきひともまじれれど、これをのみいたがり、ものをのみくひて、よふけぬ。
(1月7日)

○かかるあひだに、みなよあけて、あらひ、れいのことどもして、ひるになりぬ。
(1月11日)

○かくあるをみつゝ、こぎゆくまに、やまもうみもみなくれ、よふけて、にしひんがしもみえずして、てけのこと、かちとりのこゝろにまかせつ。
(1月9日)

3、全体で四回屈折している例。

○とかくいひて、さきのかみいまのももるともにおりて、いまのあるじも、さきのも、てとりかはして、あひごとこゝろよげなることとして、いでいりにけり。
(12月26日)

分配構文

1、分配する成分が一つあつて分配を受けるところが二つある例。

⑨〇〇〇〇は分配する成分であることを示す。

○かくのぼるひと、のなかに、京よりくだりしときに、みなひと、子どもなかりき、いたれりしくにてぞ子うめるものどもありあへる。
(2月9日)

2、分配する成分が一つあつて、分配を受けるところが三つある例
○白散をあるもの「よのま」とて、ふなやかたにさしはさめりければ、かぜにふきならさせて、うみにいれて、えのますなりぬ。
(1月1日)

3、分配する成分が一つあつて、分配を受けるところが四つある例
○あるひと、あがたのよとせいつとせはてて、れいのことどもみなしをへて、げゆなどとりてすむたちよりいでて、ふねにのるべきところへわたる。
(12月21日)

4、分配する成分が二つあつて、分配を受けるところが二つある例
○こよひ、ふなきみ、れいのやまひおこりて、いたくなやむ。
(2月8日)

5、分配する成分が三つあつて、分配を受けるところが二つある例
○このあひだに、はやくのかみのこ、やまぐちのちみね、さけ、よきものどももてきて、ふねにいれたり。
(12月28日)

連結型

例文の⑦⑧は、「連結、入れ換え基本文」の例であり、⑨は、「連結、入れ換え句の文」の例であり、⑩は、「連結、入れ換え混合格文」の例である。

⑦さて、^①「ぬさをたてまつりたまへ」といふ。
(2月5日)

⑧また、^①すみよしのわたりを、^①こぎゆく。
(2月5日)

土佐日記における文の構造

⑦しかれども、^①ひねもすに、^①なみかぜ、^①たゝす。
(2月4日)

⑧さるは、^①たよりごとに、^①ものも、^①たえず、^①えさせたり。
(2月16日)

⑨さて、^①とうかあまりなれば、^①つきおもしろし。
(1月13日)

標示型

例文の⑦⑧⑨は、「標示・入れ換え基本文」の例であり、⑩⑪は、「標示・入れ換え句の文」の例である。⑫⑬も「標示型」に属する特殊なものである。

⑦かぢとりのいはく、^①「このすみよしの明神は、れいのかみぞかし。ほしきものぞおはすらん。」とは、^①いまめくものか。
(2月5日)

⑧かぢとりのいふやう、^①「くろとりのもとに、しろきなみをよす。」とぞ、^①いふ。
(1月21日)

⑨けふ、わりごもたせてきたるひと、^①そのななどぞや、^①いまおもひいでん。
(1月7日)

⑩京のちかづくよるこびのあまりに、あるわらはのよめるうた、^①いのりくるかざまともふをあやなくもかめさへだになみとみゆらん、
といひてゆくあひだに、いしづといふところのまつばらおもしろくて、^①はまべとほし。
(2月5日)

⑪また、あるひとのよめる、^①
(2月5日)

きみこひてよをふるやどのむめのはなむかしのかにぞなほに
ほひける

といひつゝぞ、みやこのちかつくをよるこびつゝのぼる。

(2月9日)

㊦また、あるひとのよめる、

ふくかぜのたえぬかぎりしたちくればなみぢはいとゞはるけ
かりけり。

(1月27日)

㊧このなかに、あはぢのたうめといふひとのよめるうた、
おひかぜのふきぬるときはゆくふねのほてうちてこそうれし
かりけれ とぞ。

(1月26日)

喚体型

「喚体型」の例は、次に示すように、いわゆる日付の表現だけであつた。

○廿三日。

(12月23日)

○廿四日。

(12月24日)

○廿五日。

(12月25日)

第四 処理を保留した事例

以上の手続きで処理困難な事例が、土佐日記にはいくつかあつた。五つに分けて取りあげるが、解決はいずれも後日に残す。

第一、(三事例)

○やまとうたあるじのかみのよめりける、

みやこいでてきみにあはんとこしものをこしかひもなくわか

れぬるかな

となんありければかへるさきのかみのよめりける、

しるたへのなみちをとほくゆきかひてわれににべきはたれな
らなくに

(12月26日)

同様の構造のものが12月27日に一事例、2月4日に一事例、計三事例あつた。いずれも歌をふくんだものである。これは土佐日記にだけ見られる現象ではなく、歌をふくんだ古典作品には普通に見られる現象であらう。歌の前の地の文の連体形の個所「…あるじのかみのよめりける」、「…さきのかみのよめりける」を文終止と認定するのも一つの処理方法である。もし、文終止とすれば、先に「標示型」であげた例文の

○あるひとのよめる

なみとのみひとつにきけどいろみればゆきとはなとにまがひ
けるかな

(1月22日)

の類が線の個所で二文にわかれることにならう。

第二(二事例)

○そのうたは、

きときてはかはのぼりぢのみづをあさみふねもわがみもなづ
むけふかな。

(2月7日)

同様の構造のものが1月9日にも一例ある。地の文と歌とに二分されるが、地の文と歌とをそれぞれ直接単位としてよいかどうかは問題である。

第三(四事例)

○けさも。

(1月28日)

○なほやまぎきに。

(2月13日)

○「いひぼしてもつる。」とや。

(2月8日)

○もろこしもこも、おもふことにたへぬときのわざとか。

(2月9日)

いわゆる述語の省略された文である。「受結び成分」の省略された文として処理するのも一方法である。

第四(二事例)

○それはうみのかみにおおてといひて。

(1月13日)

○そのうたよめるもじみそもじあまりななもじ。

(1月18日)

いわゆる述語の省略とも考えられるが、にわかになきめかねる。

第五、歌ではじまつて歌で終わるものが六首あつた。歌の場合、区切りの問題もあるので後日の問題として残したい。

なお、処理を保留したわけではないが、特別の処理法を用いたものがいくつがある。例えば次のようなものである。

○うみをみやれば、

くももみななみとぞみゆるあまもがないづれかうみととひて

しるべくとなん。うたよめる。

(1月13日)

の場合は、「うみをみやれば」の地の文が、歌の中の「…みゆる」に係ると考えられるので、いわゆる地の文と歌の文の融合として処理した。所属は「入れ換え・基本文」である。また、

○かのくにひと、きゝしるまじくおもほえたれども、[△]このこと

ころを、をとこもじに、さまをかきいだして、[△]このことば

つたへたるひとにいひしらせければ、[△]こゝろをやきゝえたり

けん、いとおもひのほかになんめでける。

(1月20日)

土佐日記における文の構造

右の場合は、「こゝろをやきゝえたりけん」がいわゆる挿入句である。この場合は「屈折構文」の中に挿入句がはいった特別のものとして処理した。ただし、

○をとこどちは、[△]こゝろやりにやあらん、[△]からうたなど、[△]いふべし。

(1月18日)

のような場合は、「こゝろやりにやあらん」は、挿入句ではあるが、「をとこどちは」と位置を入れ換えることが可能であるから、普通の「入れ換え・混合文」とした。

注

① 国語学会編『国語学辞典』の「文の構造」の項の解説も、橋本進吉博士の「文節による文の構成」の説を中心にして、他の説をあわせ、述べている。

また、近くは山崎良幸氏も、論文「文の構造―特に助動詞の機能に関連して―」(国語学四八号)で、「一体今日文の構造について、未だ定説というに値するものを得ていない……」と述べている。

② 近くは、南不二男「文論の分析についての一つの試み」(国語学四三号)、

注①にあげた山崎良幸「文の構造―特に助動詞の機能に関連して―」(国語学四八号)などがある。

③ 拙稿「文における文脈」の観察法―書きことばの場合―(国語教育研究八号〔広島大学教育学部〕参照)

④ 日本古典文学大系・鈴木知太郎校注「土佐日記」の解説及び凡例による。

- ⑤ 森重敏「文の構造について」(国文学・第五卷・第九号所収論文)
- ⑥ 山田孝雄『日本文法学要論』一五八ページ
- ⑦ 時枝誠記『日本文法文語篇』二八九ページ
- ⑧ 市川孝「文と文章論」(国立国語研究所論集『ことばの研究』所収)三五ページ
- ⑨ 芳賀綏『日本文法教室』一一四ページ
- ⑩ 「一次成分」については、藤原与一博士に、文表現の直接的要素としての「話部」の用語と説明がある(藤原与一「日本方言文法の研究」)。また国立国語研究所「話しことばの文型(1)」に、「一次の部」の用語と説明があり、国立国語研究所「話しことばの文型(2)」には、「一次成分」の用語と説明がある。
- ⑪ 「代表」という概念は、橋本進吉博士(著作集第七冊『国文法論体系論』一六七ページ)と、芳賀綏氏(注⑨同書九三ページ)

ジ)とにある。

- ⑫ 同位文節については、橋本進吉博士著作集第七冊『国文法論体系論』一六九・一八二・一九八・二〇九・二一九ページに詳しい、橋本博士によると、同位文節は付属関係の二文節と同様、第一次の連文節を作るので、本稿では、同位文節の接続したものを一文節と同じようにとりあつかう。

係り1

係り2

例 よね、さけしばんくくる。

同位文節 同位文節

(1月14日)

- ⑬ 「句」の規定については国立国語研究所「話しことばの文型(2)」に詳しい。本稿の句は、同書八六頁(1)の規定には近い。

- ⑭ 注⑨書、一一七ページ、一二五ページ

- ⑮ 佐久間鼎『日本語学』七八ページ